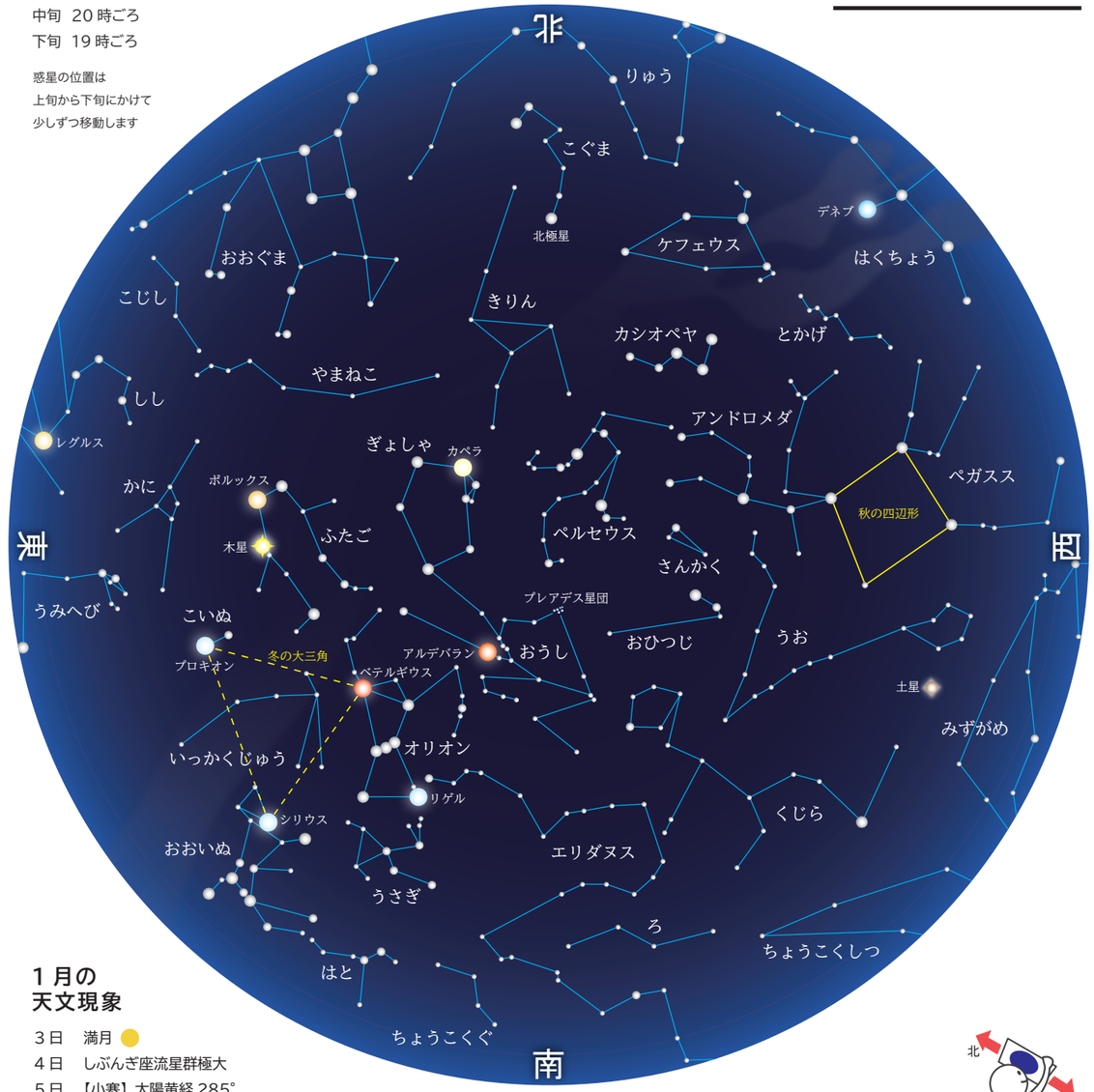
星空案内

浜松市天文台と浜松科学館がお届けする今月の星空情報

2026 1

2026年1月
上旬　21時ごろ
中旬　20時ごろ
下旬　19時ごろ

惑星の位置は
上旬から下旬にかけて
少しずつ移動します



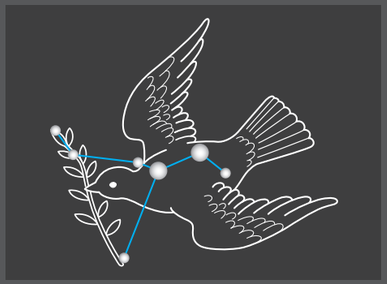
1月の天文現象

3日　満月
4日　しぶんぎ座流星群極大
5日　【小寒】太陽黄経285°
10日　木星が衝
11日　下弦
19日　新月
20日【大寒】太陽黄経300°
26日　上弦

上の星図は、空にかざして
実際の方角と合わせてご覧ください。

新年、明けましておめでとうございます。2026年が始まりました。初日の出は、ご覧になられましたか。天文現象というわけではない「初日の出」ですが、ゆっくりと昇ってくる太陽の美しさに心が動かされ、改めて自然の偉大さを感じさせられます。さて、2026年も様々な天体や、天文現象を観望することを通して、宇宙の神秘を一緒に楽しみましょう。本年もよろしくお願いいたします。

今月の星座



はと座

冬の夜空、南の低い空に見えるのが、今回紹介する「はと座」です。「はと座」は南の低い位置にあるため、南の視界が開けた場所で探す必要があります。「はと座」を探すときは、冬の夜空でひときわ目立つ「オリオン座」を目印にすると便利です。「オリオン座」の南に「うさぎ座」があり、「はと座」はそのさらに南へと広がっています。

設定者は17世紀のフランスの建築家ロワイエだとされています。しかし、はと座の原型は古代ギリシャのころからあったとされており、2世紀のアレキサンドリアの神学者クレメンスの著書に述べられていると言われています。

ロワイエはこの星座を「ノアのはと座」と名付けていました。このことから分かるように、モデルとなっているのは、旧約聖書の「ノアの方舟」に登場するハトのようです。「ノアの方舟」の話について、旧約聖書から紹介します。神ヤハウェは、人々の暮らしが乱れ、悪ばかりが世にはびこるのを目にして、世界の生き物すべてを洪水で滅ぼそうと決意します。しかし、正直でまじめだったノアだけは助けることにしました。神ヤハウェはノアに「お前たち一家は、大きな方舟を作り、その方舟に世界中の動物たちのつがい（オスとメス）を乗せ、洪水が引くのを待ちなさい。」と告げます。そのお告げ通り、四十日四十夜、激しい雨が降り続き、地上は大洪水となって、すべての人々を押し流してしまいました。大洪水のあと、ノアは舟からハトを放ちました。そのハトは陸地を探し出し、オリーブの若葉をくわえて船に戻ってきました。そこで、ノアは洪水がおさまったことを知ったということです。その話を想像すると、はと座の星の輝きが、ノアの見た「希望の光」のようにも思えてきますね。

参考図書：全天星座百科（藤井旭著 / 河出書房新社）、藤井旭の星座と神話 冬（藤井旭著 / 誠文堂新光社）

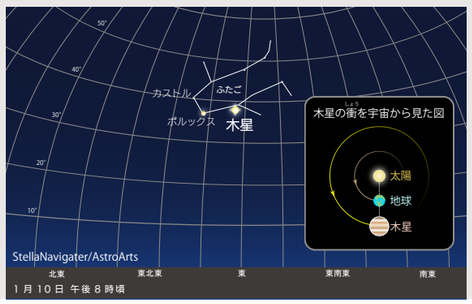
今月の見どころ星どころ

木星が衝（しょう）

文・浜松市天文台
村松 大河

1月の天文現象を挙げたときに、「しぶんぎ座流星群」を思い浮かべる方が多いと思います。「しぶんぎ座流星群」は年間三大流星群に数えられ、新年の楽しみという方もいらっしゃると思います。しかし、2026年の「しぶんぎ座流星群」は、極大となる4日未明から明け方は満月の影響を大きく受けてしまうため、条件があまりよくありません。

そこで、今回の「今月の見どころ星どころ」では「木星が衝」となる1月10日に注目してみたいと思います。「衝」とは、地球より外側を回る太陽系天体が、地球から見て太陽と正反対の位置にあるときのことを言います。太陽によく照らされるため、「衝」のときが観望のベストタイミングです。木星はとても明るく、−2.7等級になります。加えて、20時ごろには40度ほどの高さになるため、街の中でも肉眼ですぐ見つけることができます。なお、木星はおよそ1年1ヶ月の周期で「衝」となります。前回の「衝」は2024年12月だったため、2025年は「衝」がない年でした。望遠鏡でのぞくと、表面の縞模様やガリレオ衛星を見ることができます。10日は残念ながら、浜松市天文台で毎週行っている観望会がありませんが、翌週からは観望会を行いますので、皆様のお越しをお待ちしています。



星空クイズ

浜松市天文台のような、市民の皆様に天文に親しんでいただく天文台を「公開天文台」といいます。北海道から沖縄まで日本中に約400の施設があります。そして公開天文台はまもなく100周年を迎えます。さて、100年前、1926年11月21日に開台した日本最古の公開天文台はどこでしょうか。

A　倉敷天文台
B　浜松市天文台
C　なよろ市立天文台

答えは中面へ

「星空案内」2026年1月号　制作・発行

浜松市天文台
〒430-0836　浜松市中央区福島町242-1
TEL：053-425-9158　E-Mail：hao@city.hamamatsu.shizuoka.jp

浜松科学館
Hamamatsu Science Museum
〒430-0923　浜松市中央区北寺島町256-3
TEL：053-454-0178　E-Mail：info@mirai-ra.jp　www.mirai-ra.jp

浜松市天文台

OK 天候不良開催　NG 天候不良中止

ウェブサイトはこちら

イベント情報

天文台ウェブサイトよりお申込みください。

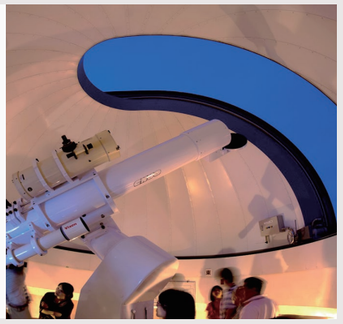
1/17・24・31（土）　NG

星空観望会 宇宙へのとびら in はままつ

季節の星座、星雲・星団、月、惑星などを観望します。

時 間　18:30 ～ 20:30　　会 場　天文台屋上

申し込み　開催日 3 日前の水曜 13 時から受付（30 分ごと先着 20 組）



1/4（日）　NG

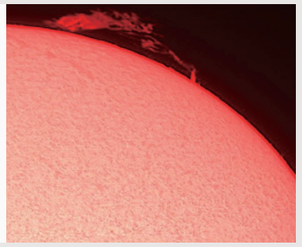
太陽・昼間の星観望会

黒点、プロミネンスなど太陽が活動する様子や、
昼間に見える天体を観望します。

時 間　14:00 ～ 16:00

会 場　天文台屋上

申し込み　予約の必要はありません。直接天文台へ。



1/18（日）　NG

メシエウォーキング

高感度ビデオカメラ（CMOS) を使って星雲や星団の電視観望を楽しみましょう。
撮影したメシエ天体のデータはおみやげにどうぞ。

時 間　19:00 ～ 21:00

会 場　天文台屋上

申し込み　1/7（水）13 時から受付（先着 10 組）

裏面のクイズの答え：正解は、A

星空を楽しむ

星のゆりかご

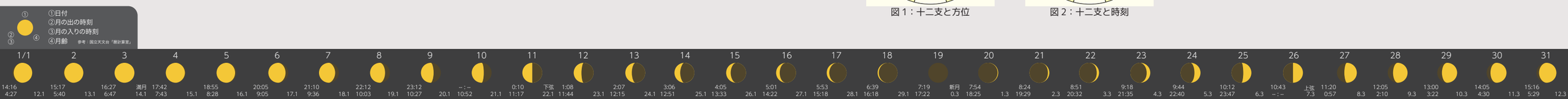
文・浜松市天文台事業協力者の会　中嶋敏勝

寒い季節に星を観ることが好きです。厚着をして寒さに耐えながら、にぎやかになった星空を眺めていると、我慢して得られた素晴らしい星々の輝きに、何故かすごく達成感を感じます。望遠鏡を覗くと、南の空には幻想的なオリオン大星雲があります。その色づいた雲の中から多数の星が生まれています。

そして、北に望遠鏡を向けると、ペルセウス座とカシオペア座の間にある大きな散開星団、二重星団があります。その 2 つの圧倒的な数の星の大集団は、何度見ても感動します。きっと、かつてオリオン大星雲のような星のゆりかごから生まれてきた星々でしょう。

私たちは、このような星の誕生や超新星爆発のような星の終焉の繰り返しから生まれてきました。そのようなことを思いながら星空を眺めますと、何百光年、何千光年離れた星々が、なんとなく自分とつながっているような、何か神秘的な思いになります。

写真：二重星団



浜松科学館

blog

プラネタリウム番組情報

解説員がライブ解説する「プラネタリウム」と臨場感ある「大型映像」をお楽しみいただけます。

プラネタリウム

天竜浜名湖鉄道 星空紀行

天浜線の車窓や沿線の星空を見に行きませんか？

平日　14:30～15:25
（土日祝・冬季は 13:00 ～ 13:55 も投映）

星空マルシェ

気軽に観られる生解説のプラネタリウムです。

平日　15:50～16:30

大型映像

©NHK

ティラノサウルス

土日祝・冬季　10:30～11:10

©D&Dピクチャーズ/NED

ヒーリングアース IN JAPAN

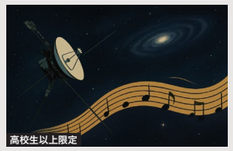
土日祝・冬季　15:50～16:30

キッズプラネタリウム

きらきら☆こんやのおほしさま

土日祝・冬季　11:30～12:05

夜の科学館　特別投映



ミュージック・プラネタリウム

1 月 9 日（金）　18:00～18:40
19:00～19:40

※冬季：2025 年 12 月 20 日～2026 年 1 月 6 日（2025 年 12 月 29 日～2026 年 1 月 3 日は休館）

今年の干支は、え～と …

column

文・浜松科学館 天文チーム 岩本歩夢

この時期よく目にする「十二支」ですが、ただ毎年動物が割り当てられているものではありません。十二支はもともと大昔の中国で、空の星の動きを観察して生まれた仕組みです。その後、日本に伝わってきて、江戸時代ごろには盛んに使われるようになりました。いまでは毎年の「干支」として使われることが多いですが、昔の人たちは年だけでなく方位や時間を表すためにも十二支を使いました。

まず方位を表すときには、北を「子（ね）」、南を「午（うま）」といったように、方位を十二支で表していました (図 1)。南北をつないだ線を「子午線（しごせん）」というのはこのためです。

そして時間を表すときには、1 日 24 時間を 12 分割し、十二支を割り当てていました。現在の表記で、23 時から 1 時を「子の刻（ねのこく）」とし、その後は 2 時間ずつ区切って「丑の刻（うしのこく）、寅の刻（とらのこく）…」と続きます (図 2)。すると、11 時から 13 時が「午の刻（うまのこく）」になります。お昼の 12 時を「正午（しょうご）」というのは、午の刻（うまのこく）の正中 (まん中) だからです。

図 1：十二支と方位

図 2：十二支と時刻

ところで、「干支」と「十二支」は厳密には違うものです。「干支」は、「十二支」に加えてもう一つのグループである「十干（じっかん）」を組み合わせたものです。「十干」は、甲（きのえ）・乙（きのと）・丙（ひのえ）・丁（ひのと）・戊（つちのえ）・己（つちのと）・庚（かのえ）・辛（かのと）・壬（みずのえ）・癸（みずのと）の 10 個でできています。この十干と十二支を組み合わせて「干支」あるいは「六十干支（ろくじっかんし）」などと呼びます。それぞれから一つずつ順番に選んでいくと、「甲子（きのえね）、乙丑（きのとうし）、丙寅（ひのえとら）、丁卯（ひのとう）… 壬戌（みずのえいぬ）、癸亥（みずのとい）」と 60 通りでひと回りします。この 60 通りの呼び方を年に割り当てたものが、毎年の干支（えと）になります。60 通りの組み合わせが一周するとまた元の干支に戻ることから、60 歳を祝う「還暦（かんれき）」という言葉が生まれました。

今年 2026 年の干支は「丙午（ひのえうま）」です。かつて丙午は、縁起の悪い年だと考えられていました。「丙午の年に生まれた人は気性が激しくなる」とか、「不幸な目に遭う」といった、ひどい迷信もあったようです。こういった迷信の影響で、前回 (1966 年)、前々回 (1906 年) の丙午には、子どもを産む人が大変少なくなってしまったという歴史もあります。しかし、干支はあくまで星の動きを元にした暦や方位を表す仕組みです。生まれた年によって、その人の性格や運命が決まることはありません。

干支は、古代の人が宇宙の仕組みを日常に取り入れた知恵の結晶です。迷信に惑わされず、この面白い歴史を学んでみてくださいね！

参考：岡田芳朗「改訂新版 旧暦読本」(2015, 創元社)